

現地 NGO との連携 ~ ジンバブエにおける国際耕種の試み

3年ぶりにジンバブエを訪問した。ジンバブエはアフリカの中では恵まれている国と言われていたが、最近新聞等でも報道されているように、失業率 50%、インフレ率 60%以上など国家経済は崩壊寸前で、国民の不満が爆発してストライキやデモが頻発し、1980 年の独立以来最悪の経済危機を迎えている。これは、主要輸出品であるタバコ(総輸出額の約 30%を占める)の国際価格低迷によって外貨収入が急減したことや、コンゴ内戦への介入・派兵とそれに伴うIMF 等の資金援助凍結によって、深刻な財政難と外貨不足を招いたこと等による。さらに、2000 年 2 月頃から白人所有の大農場の不法占拠事件が多発しているが、これがタバコ等の農産物の生産や出荷にも大きな影響を与え、さらなる経済的な打撃となっている。こうした背景のもと、2000 年 6 月に行われた総選挙では野党勢力が躍進し、独立以来 20 年近く続いていた実質的一党支配の時代が終わった。2002 年には大統領選挙が実施される予定で、一層の混乱も予想されている……。

さて、これまで AAINews でも紹介しているが、国際耕種は地域住民を対象として地域社会に根ざしたより実効のある援助活動を行うために、草の根レベルで住民参加型の活動をしている現地 NGO と連携してプロジェクトを実施しようとしている。その一環として、ジンバブエについては 1997 年から調査を開始し、いくつかの NGO を連携候補として選んだ。そのうちの一つである ZWP (Zvishavane Water Project) は、ジンバブエ南部の半乾燥地帯を対象地域として、中小規模ダム建設や Group Garden による野菜栽培支援、雨水の集水・利用 (Water Harvest)、土壌・水保全等、水の確保とその利用を基本にして、コミュニティに密着したさまざまなプロジェクトを展開している。今回は、ZWP を相手 NGO として、JICA の開発福祉支援事業に申請するためのプロジェクト内容の打ち合わせやプロポーザルの作成等を共同で行った。

そのプロポーザルのタイトルは "Mobile Workshop" である。「人材育成」のための研修の重要性に関しては改めて言うまでもないが、従来から行われている「研修センターにおける研修」は、参加者の移動や滞在費等を含む開催にかかる経費や、センターから遠距離の対象者の参加が困難である等の問題も抱えている。そこで今回提案したものが、「移動式の研修センター」である。ピックアップに必要な資機材を積み込み、村から村へ移動しながらビデオ等の視聴覚機材を使って新しい技術や情報を紹介したり、井戸掘り・植林・削岩等の現場作業を実際にしながら適正技術を伝えるという研修システムである。また、壊れた農機具の修理や新しい道具の作製をする「村の鍛冶屋」的要素も含み、特に農村地域の若年層に対して職業訓練的な機会を与えるような場にも考えている。"Mobile" と "NGO" というともにフレキシブルな「機動力」が売り物の両者の組合せは、どういふ相乗効果を産み出すだろうか？ (ジンバブエにて 湖東)



Group Garden の野菜の水やり



小学校の教室を借りて Group Meeting